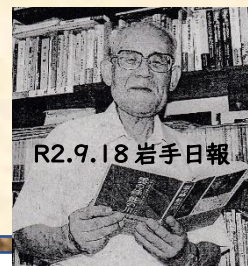


【後藤新平記念館元館長・後藤新平顕彰会顧問】

梅森 健司 先生

エイジレス・ライフ章受章



【受賞概要】《内閣府》ふるさとの先人・後藤新平の記念館長として「後藤新平顕彰会」設立に尽力してきた。自著「後藤新平物語」をテキストに顕彰塾講師・各種講演等の活動を通じて先人の偉業やその精神を次世代に継承している。さらに、自宅に図書館を設けて1万3千冊以上の蔵書を有している。また、地元新聞に26年間毎週寄稿し続けており、新聞紙上を通じて広く読書の大切さ、言葉の重みを紹介している。

【10月2日】伝達式・祝賀会・市長報告会

今年、県内唯一の受章者。この日、奥州地区合同庁舎分庁舎で、県南広域振興局の保健福祉部長から、職員や顕彰会員が見守る中、書状と盾が渡されました。

受章後、梅森先生から、次のようなお礼の言葉がありました。

「今日は10月2日。私にとって忘れることができない日です。私が生まれたのはサハリン。いわゆる海岸生まれの海岸育ちなので、教師に就く時は、海岸を希望し、陸前高田に赴任しました。その子ども達は貧しい生活で、父親達は朝早く暗



いうちに漁に出かけ、母親達は畑の仕事や牛飼いの仕事に忙しく働きます。子ども達には、『家の中の生活を考えてみなさい。自分はどう生きるか、そこが大事だ』と言いました。自分で文章を書いて考える綴り方をすすめました。子ども達は一生懸命書きました。私が勤めて23歳になったあたり、当時は大きな綴り方のコンクールがあって、生徒の作品を出すことにしました。2回も3回も書き直させ、昭和33年に岩手県で第1位をとりました。34年も連続1位。3年目の35年も連続岩手県で第1位。今までなかったことです。これらを契機にして、子ども達は一層一生懸命に書くようになりました。昭和

35年10月2日。今日がちょうど60年目の節目にあたるのです。」

「教師を退職してから、後藤新平記念館に勤めさせていただきました。後藤新平顕彰会顕彰塾というのを開き、夏休みの3日間、主として水沢小学校の6年生を対象として学習することになりました。そのテキストとして『後藤新平物語』を使いました。鶴見祐輔という人が後藤新平の正伝を書いたけれども、子ども達にわかりやすくということで、これを私が書いたのです。これをもとにして、後藤新平について考えることにしました。後藤新平の幼少時代。2歳の時、水沢で大事件が起きました。今、日高火防祭をやっているけれども、1859年3月13日、柳町から火が出て562戸が焼ける大火災となりました。3か月後の6月9日、今度は、川口町から火が出て60戸が焼け出されました。新平が2歳の時に、水沢は622戸も焼けたのです。4～5歳になった時に、父母から訓誡和歌集を学びました。それは今も記念館に展示してあります。その中に、『盛りをば見る人多し散る花の跡を訪うこそ情けなりけれ』というのがあります。桜が咲いている時は、人が集まって来るのが、散ってしまえば誰も見向きもしない。というのですが、『情けをかける』これが大事なのです。物をただ暗記するのではなく、それを世に生かす。自分に生かす。そういうことを顕彰塾で学ぶのです。ただ暗記するだけではなく、それをどのようにして生活に生かすか、地域に生かすかが大事なのです。今の公民館も、虎の門事件で罷免された部下の正力松太郎を援助した。情けをかけてやった。だからこそ、後藤新平が亡くなって13回忌の時に、新平の出身地の水沢に西洋的な建物を建てたいとして建てられた。『後藤新平は死んでも、その志はまだ公民館に生きている。』というようなことを学習するのです。」と、話されました。

授賞式後、コロナ感染拡大防止を考慮し、小万梅において、規模を縮小しての顕彰会常任理事に絞ったお祝いの会を催しました。さらに、午後からは、市長への報告会も行い、労いの言葉をいただきました。

